

第3回しらかみ地の塩基金 文化講演会 2025年11月15日(土) 19時~21時
能代市文化会館(中ホール)

アジア・太平洋戦争から80年

私たちが知らされていない東南アジア側の〈負の記憶〉

根本 ^{けい} 敬 (上智大学名誉教授 連絡先: kei-n@sophia.ac.jp)

はじめに — 「太平洋戦争」ではなく「アジア・太平洋戦争」

- ① あの戦争は「真珠湾奇襲(1941年12月8日)で始まり、広島・長崎への原爆投下(1945年8月6日・9日)で終わった日米戦争だった」のではない
*真珠湾を奇襲した理由は、日本軍の東南アジア侵攻を有利に進めるため
⇒ 真珠湾奇襲の約1時間前にマレー半島コタバルに上陸
(ここに戦争の目的が示されている)
- ② 南進論(東南アジア侵攻論)と北進論(ソ連侵攻論)の二兎を追う
⇒ 中国に100万人以上の日本軍が最後まで駐屯、戦闘に従事(「大陸打通作戦」等)
- ③ 激戦地となった東南アジア(特にフィリピン、ビルマ) ⇒ 多くの人を戦争に巻き込む

1 グローバル(世界的)な戦争としてのアジア・太平洋戦争

(最後は連合国51か国を敵に回す!) *United Nations

A 日本が直接戦った国

中国(蒋介石=国民政府軍(重慶)、毛沢東=八路軍(延安))、米、英、蘭、豪、仏(注:1945年3月8日まで仏領インドシナを共同統治、翌日仏軍を武装解除)、

B 日本が戦中に占領した国・地域

米領フィリピン、蘭領東インド(インドネシア)、英領ビルマ、英領マラヤ、英領シンガポール、英領香港、ポルトガル領ティモール(1942年2月)

C 日本が進駐した国(1940-45)

仏領インドシナ(北部1940年9月、南部41年7月)、タイ(1941年12月)

D 戦前からの日本の植民地と侵攻先

台湾、南樺太、朝鮮、満州、華北・華中(一部華南も)
+ 南洋群島(国際連盟委任統治領という名の日本領⇒サイパン島、パラオほか)

E 日本軍への大規模な抵抗や反乱が生じた国

中国(国民政府軍、八路軍、新四軍)、ビルマ(AFPFLによる一斉武装抗日)
タイ(自由タイ運動)、フィリピン(フクバラハップ、USAFFEゲリラ)

2 なぜ日本は東南アジアへ軍事侵攻したのか？—歴史的背景—

- 第一段階** 「大国」ロシアの東方進出の「脅威」から「日本を守る」ため
⇒ 日清戦争（1894-95）、日露戦争（1904-05）、韓国併合（1910—）
- 第二段階** 「朝鮮半島の支配だけでは日本の国益確保と国防圏は不十分」という認識
⇒ 満州事変（1931-32）、上海事変（1932）、
日華事変（日中戦争争：1937—）、ソ連との敵対（のちに中立条約締結）
- 第三段階** 米英仏による重慶の蒋介石政権（中国国民政府）支援（援蒋ルート）を遮断し、
泥沼化した中国戦線を有利に転換させるべく、南方の豊富な資源を獲得しようとする（特にスマトラ島とボルネオ島の石油確保）
この結果、南進論が台頭、北進論と並立状態に

（参考）大日本帝国憲法（明治憲法、1890年施行）の致命的欠陥

- ⇒ 天皇の大権を統帥権（軍の指揮権）と統治権（政府の指揮権）に分けたため、
軍部が1930年頃から前者（統帥権）を悪用、「統帥権干犯」を合言葉に政府
と帝国議会の両方を圧迫して軍事予算の制約を行いにくくし、その結果、予算は実
質的に青天井となり、軍部による政治への介入がはびこるようになる
- ⇒ 明治憲法の中に併存していた「立憲君主としての天皇」と「神聖なる天皇」
という矛盾する定義のうち、軍部は後者を過度に強調（特に1930年代～）、
美濃部達吉の天皇機関説を弾圧

3 開戦後の政府・軍部の基本方針

- ⇒ 「南方占領地行政実施要領」に基づき軍政を実施
骨子は「治安回復、資源の早期獲得、軍部隊の現地自活」
- ⇒ 対外向けには「大東亜共栄圏」の確立を唱え、フィリピンとビルマには独立付与を
約束（1942年1月22日に帝国議会で東条首相が声明）、その後1943年8月にビル
マ、10月にフィリピンがそれぞれ「独立」
- ⇒ マラヤ、シンガポールとインドネシアは「帝国領土」として確定（1943年5月「大
東亜政略指導大綱」）、1944年9月になって戦局の悪化に鑑み、1年後のインドネ
シア独立を約束（間に合わずに敗戦）。

4 占領期に日本が残した汚点（4つの代表的事例）

- ① フィリピン ⇒ 「パターン死の行進」 *1942年4月
大量の捕虜（7万6000人）と民間人を炎天下で計3日間112キロ歩かせ、1万人以上
が死亡。（このほか、1944年10月米軍がレイテ島へ上陸以降、45年1～2月マニラ市
街戦をピークに、100万人以上のフィリピン市民が死亡）

②シンガポール⇒ 「検証」 *1942年2月～

「検証」という名の華僑虐殺(戦後のシンガポール華人社会は犠牲者5万人と推計)

③ビルマ、タイ⇒ 泰緬鉄道建設工事

(連合軍捕虜と現地労務者の大量動員による1年4ヶ月の突貫工事)

- ・民生用と偽った軍事鉄道(海上輸送が困難になったため陸上輸送に代替)
- ・1942年6月(工事開始)～43年10月(開通)。厳しい自然環境、劣悪な労働環境、虐待により連合軍捕虜12,000人を含む10万人以上が犠牲
- ・14カ国30万人が巻き込まれた悲惨な鉄道建設工事として国際的に記憶される

④ビルマ⇒ カラゴン村虐殺事件 1945年7月

(戦争末期、英軍に追い詰められた日本軍部隊が、ビルマ南部の小村で英軍に情報を提供する村人がいるという情報を信じ、師団長命令に基づいて村人を大量殺害)

- ・村人637人(男性174人、女性196人、子供267人)が犠牲 *生存者は数名
- ・仏教徒の多いビルマで少数派のインド系イスラーム信徒(ムスリム)が住む村だったため、独立後のビルマ政府はこの事件の記憶を国民に継承しようとしなかった

5 アジア・太平洋戦争の推移

1941年12月8日 日本軍、マレー半島コタバル上陸(→シンガポールへ向けて南下侵攻)
その1時間後にハワイ真珠湾奇襲(*遅れた対米英宣戦布告)

1942年2月15日 日本軍、シンガポール占領

3月9日 日本軍、ジャワ島占領(蘭領東インドのオランダ軍降伏)

4月18日 本土初空襲(北太平洋上の空母から発進したB24爆撃機16機)
(東京、川崎、横浜、横須賀、名古屋、神戸などで被害)

5月6日 日本軍、フィリピン全土占領(米比軍が最終的に降伏)

6月4日 日本軍、ビルマ全土占領

6月5日 ミッドウェー海空戦敗北(空母4隻を喪失)

*ミッドウェー島攻略と米空母の撃滅という二兎を追って失敗

*開戦6ヶ月で戦局転換(報道管制いっそう強まる)

1943年2月7日 ガダルカナル島の戦い、前年からの長期消耗戦を経て撤退

*多数の餓死者を出す *「転進」という用語の使用が始まる

*この年、ニューギニア戦線で死闘が繰り広げられる

1944年6月16日 B29型爆撃機による初空襲(北九州一帯)

7月3日 ビルマからインド攻略を目指したインパール作戦(3月～)大敗

7月9日 米軍、サイパン島制圧(日本軍壊滅:「玉砕」という用語を使用)
*東条英機内閣総辞職(18日)

10月20-25日 レイテ沖海戦で大敗、連合艦隊は事実上壊滅

*神風特別攻撃隊(特攻隊)による「体当たり」戦法のはじまり

- 11月～ 本土空襲本格化（サイパン島から大量の B29 来襲）
- 1945年2月27日 米軍、フィリピン奪還
硫黄島戦で敗北（1ヶ月にわたる激しい攻防の末、日本軍壊滅）
- 3月9日 東京大空襲（夜間の焼夷弾大量投下で10万人が死亡）
- 4月23日 日本軍（ビルマ方面軍）ラングーンを放棄、南部へ撤退
*前月（3月）末からビルマ側の抗日武装蜂起はじまる
- 6月23日 沖縄戦敗北
（3月末からの激しい攻防で日本軍壊滅、10万人以上の民間人犠牲に）
- 7月26日 連合国がポツダム宣言（無条件降伏の要求）を出す
*日本政府は「笑止千万」として無視
- 8月6日 広島に原爆投下
8日 ソ連、対日宣戦布告、満州に侵攻
9日 長崎に原爆投下
10日 日本、ポツダム宣言受諾へ動く（御前会議）
14日 日本、ポツダム宣言を公式受諾（連合国に公式返信）
15日 昭和天皇による国民に向けた玉音放送（終戦の詔）
- 9月2日 日本政府による降伏文書調印（戦艦ミズーリ艦上）
*これが国際法上の日本の敗戦日（8月15日ではない）

6 戦争の実相を知る（戦場まで行って「戦って死んだ」将兵は少数派）

日中戦争以降（1937年～） 軍人・軍属全戦没者 230万人のうち
海没死 35万8000人（15.6%）
餓死・病死 140万人（61%）

「戦死者」のうち76.6%は「戦場で戦って死んだのではない」という事実！

7 アジア・太平洋戦争は戦後どのように記憶・忘却されているか？

☆ 記憶とは「何を忘却したか」と実質的に同義

⇒ 「忘却の historiography」（特定の事実を「忘れる」歴史編纂）という逆説

（Tessa Morris-Suzuki による2006年の論考「帝国の忘却」から）

東南アジア側の記憶と忘却

- (1) 多くの命が傷ついた「暗黒の時代」「物不足の時代」「ファシズムの時代」「屈辱の時代」 Kenpeitai, Romusha, bakkyaro などの言葉によって象徴される「暴虐の時代」
- (2) 自らの努力で独立闘争に弾みをつけた時代（戦後の政治エリートたちの記憶）

* 忘却されやすい記憶

⇒ 対日協力の史実（初期の日本軍歓迎ムード、

日本軍の権力を後ろ盾にして弱い者いじめをする人々の出現など

旧宗主国側の記憶と忘却

- (1) 長年「育ててきた」植民地を突然「喪失」したという記憶
 - 英国⇒ ビルマ、シンガポール、マレーシア
 - オランダ⇒ インドネシア
 - フランス⇒ インドシナ（ベトナム、ラオス、カンボジア）
- (2) 日本軍は「残虐」だったという記憶（旧宗主国、連合国に共通）
 - * 忘却されやすい記憶
 - 「植民地支配」とそれに伴う「植民地責任」

日本側の記憶と忘却

- (1) 忘却以前の無知（知らない、知らされていない、知ろうとしない）
 - ⇒ 記憶の断絶、無関心
- (2) 「解放史観」⇒ 「日本のおかげで東南アジア諸国は独立できた」かのような解釈
 - ⇒ 歴史教科書問題
- (3) 兵士の苦労（多数の戦記物に代表される復員軍人たちによる戦場の苦しい思い出）
 - * 忘却されやすい記憶
 - ① 「戦死者」のうち 76.6%は餓死や病死や海没死だったという事実
 - ② 泰緬鉄道建設工事における連合軍捕虜と現地労務者の虐待、シンガポールの華僑虐殺、フィリピン戦における「バター死の行進」ほか、日本にとって不都合な史実（＝加害の史実）

8 負の記憶の語られ方（日本占領期を経験したビルマ人2人の語りから）

事例1（忘れて許す） 日本占領下のビルマで抗日武装闘争に参加した農民男性 H さん
(聞き取り時 61 歳) (聞き取り年月日:1987 年 6 月 5 日、ビルマにて、使用言語:ビルマ語)

「はじめはビルマに反攻してきた英軍と戦うためという名目で、(ビルマ国軍による)ゲリラ戦の訓練に参加させられたが、訓練の最終段階で敵は英軍ではなく、実は日本軍だと隊長に聞かされ、心が高鳴った。日本兵は我々の牛を盗み、家畜を撃ち殺し、食糧を徴発した。飛行場建設などの労働に強制動員された。彼らは我々の僧侶をなぐったり、ひどいときは井戸に投げ入れたりもした。我々にピンタを張ることも多かった。彼らは女性に乱暴を働いた。私の義理の姉もその被害者の一人だった。彼らに復讐するにはこれがとても良い機会だと思った。」

「今となっては村の人間で日本兵を憎んでいる者は私を含め一人もいない。元日本兵たちが戦後、ビルマをなつかしく思い出してこの国を再訪していることについて、全く悪い気はしない。我々ビルマ人のものの考え方はそういうものなのだ。いつまでも怒りを長引かせないように生きている。日本兵が女性に乱暴を働いた件については、40 年以上たったいま、被害者であれ、加害者であれ、どちらも年老いてしまっている。今さら問題を蒸し返したところで、どうしようもないことだ。」

事例2 (忘れない、許さない)

日本占領下のビルマで家族と共に軟禁状態に置かれた英系ビルマ人女性 G さん
(聞き取り時 83 歳) (聞き取り年月日: 2008 年 2 月 27 日、英国にて、使用言語: 英語)

「一昨年、甥を通じて、日本人の大学教授(=根本)が私と会いたがっていると聞き、もう昔のことだから自分の体験を話しても良いと思った。でも、あなた(=根本)を実際に目の前にしたとき、いくらこの人は戦後生まれの日本人なのだと自分に言い聞かせても、感情が許さなかった。だから前回はあなたに話をすることができなかった。あれから 2 年たってあなたの誠意を感じたので、今回は冷静に話ができるのではないかと思うようになった。」

「三人姉妹の私たちは、ビルマ高原地帯の町メイミョウに住んでいた。日本軍侵入時に国外への脱出に失敗し、両親と共に英系ビルマ人の収容所に入れられてしまい、そこでの生活を強制された。父は過労が原因ですぐに病気で亡くなり、その後、母と私たちは日本軍部隊の手伝いをさせられた。料理や洗濯、裁縫といった作業はさほど困難なくこなせたが、日本軍将校の酒の相手をさせられるのはとても嫌だった。ある日、母のところへ日本軍の大尉がやってきて娘 3 人のうち誰でもよいから「慰安婦」として日本軍に提供せよと命令した。母は娘を差し出すくらいだったら 3 人を殺して自分も死ぬと主張し、激しく拒否した。大尉は最後に根負けして去っていった。」

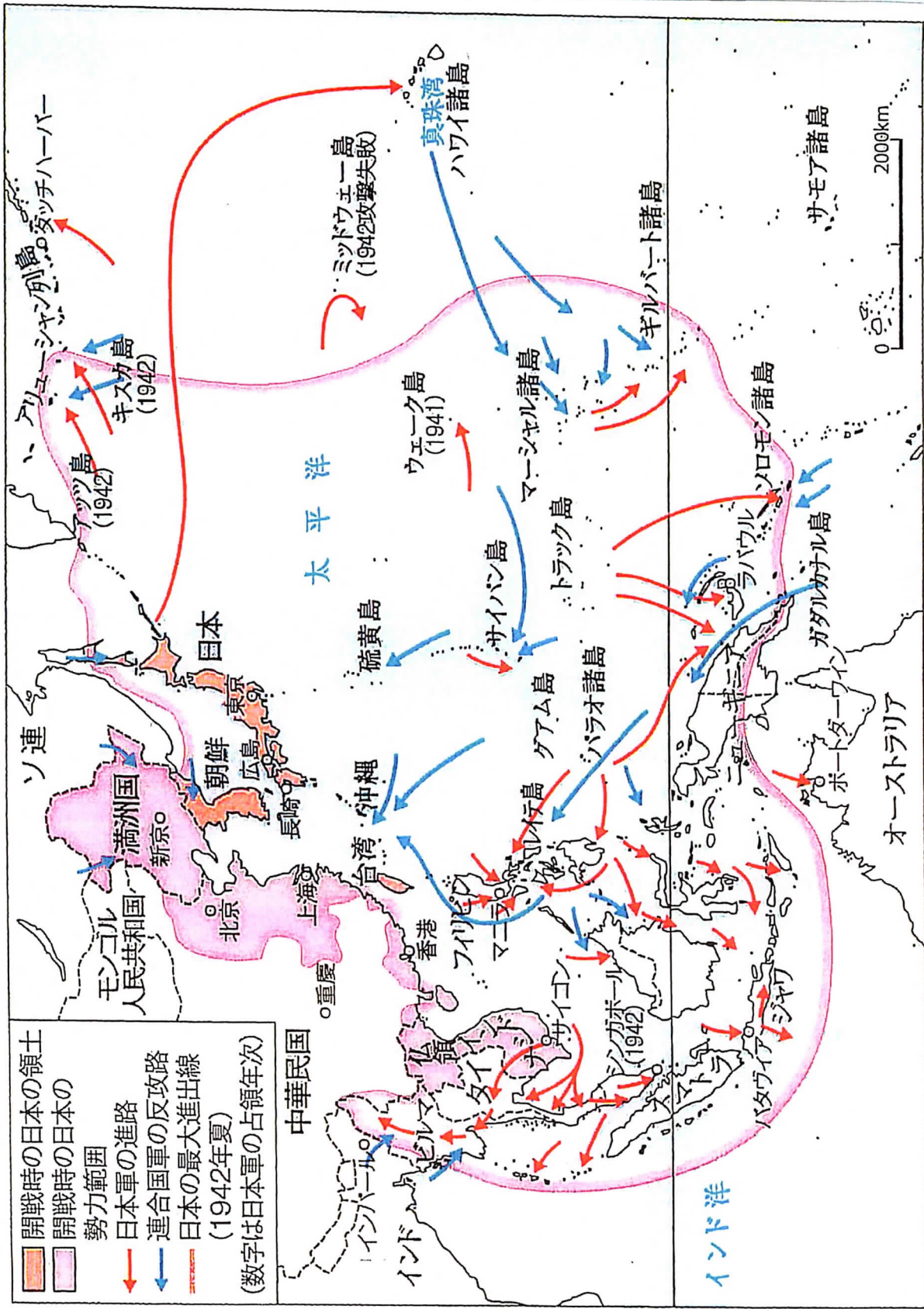
「戦後、ビルマを出てシンガポールとタイでタイピストとして秘書の仕事をつづけたが、日本人との接触はできるだけ避けてきた。退職後は英国へ移住し、甥の勧めに従ってロンドンの高齢者施設に入所した。英国で日本人と接触したのはあなたが最初だ。」 ⇒ 2016 年 11 月逝去

☆戦後を生きる日本人は、このような東南アジア側の〈負の記憶〉を知らないまま、東南アジアの人々との友好関係を築いて良いであろうか？ 誰かが伝え続ける必要があるのではないか？ 日本を二度と侵略戦争に走らせたり関わらせたりしないためにも。

おすすめ文献

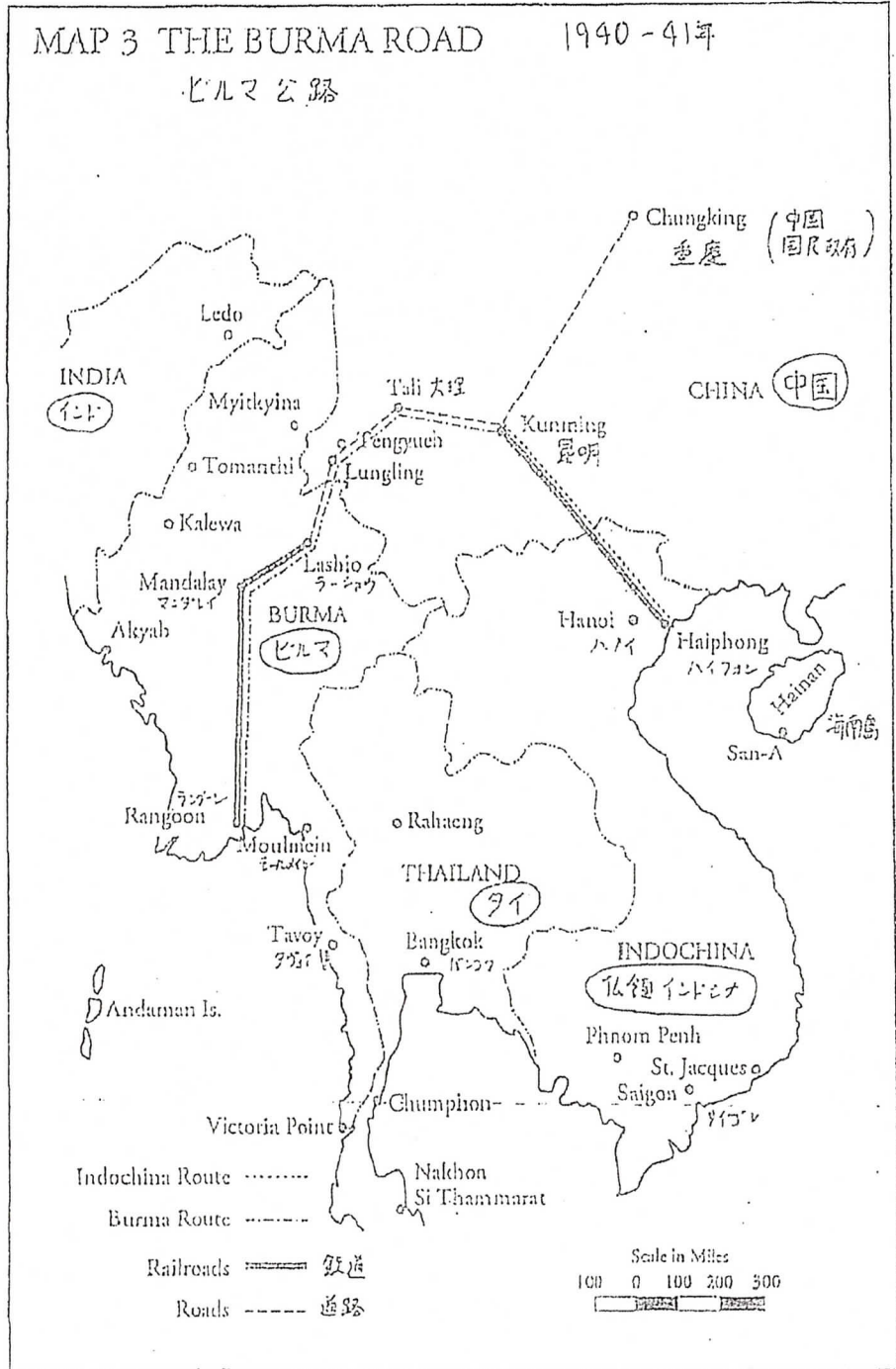
- 吉田 裕、2007、『アジア・太平洋戦争』(岩波新書)、岩波書店
後藤乾一、2022、『日本の南進と大東亜共栄圏』(アジアの基礎知識 6)、めこん
根本 敬、2010、『抵抗と協力のはざま—近代ビルマ史のなかのイギリスと日本』、岩波書店
吉川利治(編著)、1992、『近現代史のなかの日本と東南アジア』、東京書籍
テッサ・モーリス・スズキ (Tessa Morris-Suzuki)、2006、「帝国の忘却」、
『講座アジア・太平洋戦争』7 卷(支配と暴力)、岩波書店 所収

アジア・太平洋戦争



(資料)

援蒋ルート



『しらかみ地の塩基金』文化講演会について

この講演会は「地の塩塾」主催の「市民講座」・「文化講演会」に起源を発するもの。行政による市民のための講演会が財政他の事情によりできなくなったこともあり、これを市民・住民の努力と協力によってカバーするものでありました。「能代文化学園」のはたらきとして引き継がれ、いま新たに『しらかみ地の塩基金』年一回の事業として復活を図るものです。

この度の第3回講演会は、主に「地の塩塾同窓生とその関係者」および事業を背景に活動なさっておられる方々を中心に個人の方々にご協賛・ご寄付いただき実現することができました。下記にお名前を記して、深い感謝を表します。

記

- | | | | |
|---------------|--------|------------------|----------|
| 1 医療法人 アイリス | 佐藤 直樹 | 36 西塚医院 | 西塚 富佐夫 |
| 2 あさの薬局 | | 37 のしろ眼科クリニック | |
| 3 アーンスト逸子 | | 38 のしろ病院 | |
| 4 いたうや | 伊藤 真知子 | 39 能登 祐子 | |
| 5 越中技建 | 越中 秀雄 | 40 原田 千代子 | |
| 6 木村 俊介 | | 41 平野 善憲 | |
| 7 笠原 昇子 | | 42 深川 典子 | |
| 8 協立 | 川間 一平 | 43 松浦 和子 | |
| 9 工藤 茂美 | | 44 松野 暁 | |
| 10 工藤泌尿器科医院 | 工藤 茂宣 | 45 森田 茂美・奈美子 | |
| 11 熊谷建設(株) | 熊谷 勝 | 46 柳谷 美喜子 | |
| 12 K美容室 | 荒木しのぶ | 47 山須田医院 | 山須田 健 |
| 13 小泉医院 | 小泉 亮 | 48 山本酒造店 | 山本 友文 |
| 14 幸和機械(株) | 福田 幸一 | 49 山本 昌子 | |
| 15 小西整形外科医院 | 小西 能夫 | 50 楊整形外科医院 | 楊 国隆 |
| 16 後藤 邦子 | | 51 特別非営理活動法人 友心 | 中田 里菜・紀彦 |
| 17 後藤内科医院 | 後藤 寿則 | 52 (株)ワイエスプランニング | 鈴木 貞幸 |
| 18 佐々木 正憲 | | 53 渡部 英敏 | |
| 19 佐藤 辰 | | 54 渡辺 正樹 | |
| 20 (株)サンワ興建 | 渡部 清春 | | |
| 21 シャトー赤坂 | | | |
| 22 白坂内科胃腸科医院 | 白坂 知之 | | |
| 23 タウンホテル ミナミ | | | |
| 24 武田 孝義 | | | |
| 25 たなはし絵里奈 | | | |
| 26 大丸不動産 | | | |
| 27 丹波 望 | | | |
| 28 (株)厨房市場 | 平川 義明 | | |
| 29 (株)塚本油店 | 塚本 真木夫 | | |
| 30 (株)塚本建材店 | 塚本 広明 | | |
| 31 土崎 博之 | | | |
| 32 津村 陽子 | | | |
| 33 富樫社労士事務所 | 富樫 善明 | | |
| 34 成田 繁穂 | | | |
| 35 成田 弘子 | | | |

(敬称略 アイウエオ順)